

検証

プラスチック15年

鋼橋塗替え塗装の前処理・素地調整に、プラスチック(素地調整程度1種)を使う「Rc-I塗装系」が標準工法に採用されてから15年。市場が拡大する中で、けん引役は何を考えているのか、聞いた。(回答は次号に続く)

市場けん引役に聞く

新システム導入できる指導者を

厚地鉄工

厚地 一郎氏



①結構時間が経過しているなと感じる。私の場合はプラスチック製造販売に関わるようになって30年を迎えたが、橋梁関係の屋外型プ...



自律型プラストロボ

②プラスチック装置メーカーからの視点でプラスチック処理に関して考えると、プラスチック処理の施工車は上昇しなければならぬ。理由は品質、粉じん、騒音対策の向上。求めれば当たり前であるが、そうした単純な意味ではな...

- 質問(1) プラست標準化から15年。率直にどう感じているか? (2) Rc-I塗装系の品質、価格、粉じん、騒音など、どこに課題があるか? (3) 同塗装系の5年後の未来は、どのような変化が生まれていると思うか? (4) 塗替え塗装工事の現状をどう見ているか? (5) その他、注目していることなど

各要素をいくらか改良改善して品質を向上させても、すべての現場で再現できなければ意味がない。新しい重防食処理評価システムと言えはインスペクターのことだが、レベルの低いインスペクターを増やしても全く意味がない。むしろAIに判断させた方が安上がりとなり、本末転倒となる。私の言うところの新しい重防食評価システムとは、現場の環境など含めたうえで、さらに良いものを評価することであり、規定数値しぼりを強制するシステムのことはない。今後の課題としては、重防食における現場で、新しい重防食評価システムを導入できる指導者が求められていると考えている。

ニューフツソシステム ~新たなる時間軸~
有機ジメチルシリコンペイントの弱溶剤化によりオール弱溶剤システムが完成。弱溶剤厚膜形ふっ素樹脂塗料上塗りのラインナップにより長期耐久性が実現。塗替え周期が新たな時間軸に向かう。
TOHPE CORPORATION
https://www.tohpe.co.jp/

品質を確保できる運用の検討を

池田工業



(1) 関係者の尽力により、15年でプラスチック工法が標準化の第1段階を達成できた。今後は第2段階として、プラスチック品質の確保ができる運用の検討が必要と考える。プラスチック工法は、現場

池田龍哉社長

の制約、施工管理(計画)作業員の技量、施工機械の能力、検査員の検査スキルで品質が決まる。例えば、①施工管理・プラスチック施工管理技士(素地調整管理技士)などの資格制度の検討

- ・施工困難部位、施工不可能部位の選定とその対策に関する知識
・粉じん作業でのマスク選定に関する知識
・集じんに関する法令及び機械知識
②作業員の技量
・作業員のプラスチック施工時間管理
・実技による技能認定制度
③施工機械の能力
・デッドマンスイッチの標準化
・非常停止ボタンの標準化
・エアードライヤーや



塩の影響で塗膜下腐食

アフタークレーターの標準化
(2) 他工法に比べて素地調整品質が優れているから、プラスチックが選定されている。

表面から除去する②新しい塗装システムの接着性を高めるための適切な表面粗さを得る。③世界のトレンドは脱二酸化炭素化だが、現場に持ち込む機器でエンジン発電機、コンプレッサ等を水素化や充電タイプに変更は難しいため、ハード面の変化は現状と変わらないと思う。

塗装への影響 技術的知見はまだ

匿名

①橋梁塗替え工事に携わるプラスチック施工業者の品質の向上が徐々に感じられる。2005年当時、プラスチック施工業者はプラスチックを行うことを目的とし、仕上りの精度、塗装への品質への影響については全く考慮されていなかった。また、仕上がりや塗装可否判断を塗料メーカーに問い合わせる事例が多かったが、思い返され、②プラスチックは塗装下地を形成する重要な品質項目だが、塗装への影響度への技術的知見はまだまだと考える。